

# News Letter

公益財団法人 集団力学研究所 No. 57 2013.12.24

ホームページ <http://www.group-dynamics.org/>

## ごあいさつ

代表理事（所長）杉万俊夫

半年前の 56 号（2013 年 7 月発行）に続いて、ニュースレター 57 号をお届けします。

集団力学研究所は、昨年（2012 年）3 月に博多百年町屋「高橋邸」に居を移しました。本年 7 月、博多祇園山笠追い山の前日には、移転 1 周年記念イベントとして、林田真心子先生（福岡女学院大学）を講師にお招きして、メディア・リテラシーに関する講演会を開催しました。

集団力学研究所は、組織塾と地域塾という 2 つの実践道場を開催しています。いずれも、組織や地域の活性化に取り組む方々が、経験を持ち寄り、共に育みあう「共育」の場です。一足先に定着した地域塾に続いて、組織塾も、各企業の若い方々を中心に本格的な活動が開始されつつあります。関心のある方は、どうぞ、ご参加ください。

本年 4 月から、「看護管理者支援プロジェクト」をスタートしました。リーダーシップ、コミュニケーション等々の研修・講演会を、ほとんど実費で提供しています。2013 年度は、大阪で、研修を 8 コース、講演会を 9 回実施しています。来年度は、東京、福岡、愛媛でも開催予定です。

## 研究所からのお知らせ

「ビデオ講座 集団力学」好評販売中

組織診断アンケートは「集団力学研究所」で

「看護管理者支援プロジェクト（福岡地区）」スタート

詳細は最終ページをご覧ください！

## 移転1周年記念イベント報告

### 講演会「メディアと地域をめぐる実践について」

福岡女学院大学人文学部メディア・コミュニケーション学科

林田真心子

博多の町に夏の訪れをつげる博多祇園山笠。祭りがクライマックスにさしかかったその季節は、じっとしているだけでも汗ばむほどの強い日差しが照りつけていました。しかし、博多百年の町屋「高橋邸」は、一步足を踏み入れただけで、あっという間に暑さを忘れてしまうほど、静かでゆったりとしていて、歴史に裏付けされた落ち着きある空間に、あっという間に魅了されてしまいました。

その高橋邸への研究所ご移転一周年の節目の会に、お話をさせていただく機会をいただきましたことを、改めまして、心から感謝を申し上げます。



私は、大学時代に集団力学を学びました。その後、放送局につとめ、現在はメディア論を専門分野とし、メディアに関する実践的な研究に取り組んでいます。大学時代のご縁でこの機会をいただいたとき、まず思い起こしたのが、当時学んだことでした。そして、現在まで道のりをていねいに振り返ってみると、改めて、当時の問題関心と現在の活動が接続していることに気づきました。

そこで研究会でも、テレビ局での経験から、その後大学院に進学して感じたことを時系列で追い、大学時代の学びがどのようにメディアの実践的活動につながっているのか、お話をさせていただきました。その上で、現在、学生と放送局の方々と協働的に取り組んでいるメディア・リテラシー実践活動など、地域とメディアをめぐる実践事例をご紹介しました。

集団力学研究所では、「当事者と研究者が共同で実践を展開し、そこから地域を発信していく人間科学」(研究所パンフレットより)としてのグループ・ダイナミクスを軸に、地域の共同実践に取り組まれているとうかがっておりましたので、私からは、特に、メディアと社会という視点から、協働的实践の意義や課題について問題提起をさせていただきました。会場の皆様も、自治体や一般企業などで、さまざまな地域実践に取り組んでおられる方が多く、そのご意見や、ご質問はとても興味深いものばかりでした。特に、メディ

アとは何かを率直に問うご質問や、実践の根底にあるメディアと私たちとの関係性について問い直すようなものが多かったように思います。そのやりとりを通して、一番学ばせていただいたのは、実は、発表者である私自身だったように思います。

また、畳敷きの落ち着いた雰囲気のお部屋で、車座になっての研究会は、自然とあらゆる距離を狭めてくれました。会そのもののデザインが、ひとつの共同性を育む地域実践であったのだと、今改めて、感じています。



## 「京都大学デザイン学大学院」と集団力学研究所

### 4 サテライト合同合宿

杉万俊夫

2013年4月、京都大学に新しい大学院「デザイン学大学院」が誕生しました。製品デザインやアート系デザインではなく、新しい社会システム（社会の仕組み）のデザインを教育する大学院です。①生産・製造システム、②建築・土木システム、③情報システム、④組織・コミュニティの4分野で構成されています。私は、組織・コミュニティのデザインを担当しています。

コミュニティ・デザインを教育するためには、学生が実習やインターンシップを経験できるコミュニティが必要です。そこで、私がこれまで研究現場にしてきたコミュニティから4つを選定し、同大学院のサテライト（分室）に認定してもらいました。集団力学研究所は「博多サテライト」として認定を受けました。その他に、智頭町・山形地区サテライト（鳥取県智頭町）、伊丹サテライト（兵庫県伊丹市）、花背分室（京都市）が認定を受けました。

去る11月8-10日、4つのサテライトのメンバーが一堂に会す合同合宿を、智頭町・山形地区サテライトで開催しました。集団力学研究所からは、八ッ塚（副所長）、黒宮、近藤、私の4名が参加しました。

合同合宿では、各サテライトがこれまで行ってきた活動を報告しあい、深夜まで活発な議論が続きました。とくに、主催者の智頭町・山形地区サテライトでは、戦前までの旧村

(山形村)を住民自治の場として再生する活動が進行しています。旧村には、村長、村議会、村役場がありました。しかし、それらは、中央政府のトップダウンによって設けられたものでした。今度は、それらを徹底した住民による草の根ボトムアップでつくりました。その住民組織が、行政(町役場)とイコール・パートナーシップで「政治」をやろうというわけです。智頭町では、6地区(旧村)のうち、5地区で同様の活動が進行中です。合同合宿では、山形地区以外に2地区の活動も見学することができました。

来年度は、集団力学研究所で合同合宿を開催する予定です。



紅葉した森を背に (智頭町山形地区芦津溪谷)

## 「地域塾」レポート

### 町内会改革の報告・第3弾 ～新会長へどう引き継ぐか?～

福岡市K校区・駅前町内会長 服部正

当ニューズレターで2度にわたってご紹介してきた「駅前町内会」は、戦後開発された住宅地と商店街を中心とした、駅前の小さな町内会です。居住者の加入率は6割弱、シャッターを閉じた店が目立ち、少子高齢化が進んでいます(75歳以上36名)。

4年前、前町内会長から町内会長を引き受けて欲しいと依頼されたのが事の発端でした。「町内会長のなり手がいないので、会長をやめられない」と言いながら「町内会長は出ごことが多い。しかし活動内容はくだらない」とのお言葉。それでは誰も引き受けるわけがありません。一緒に町内会について勉強するつもりで、まずは副会長に就任したのが始まりでした。

1年勉強してわかったのは、町内会の制度に大きな変化が起きていることです。9年前、

福岡市では、それまで町内会長が兼務していた「町世話人制度」が廃止され、町内会など地域団体で構成する自治協議会制度が発足しました。ならば、行政の末端機関から、必要かつ「身の丈にあった活動」を楽しむボランティア組織へと変わればよいのです。みんなが参加できるイベントとして、「やきいも大会」を開催し、楽しい町内会をアピールすることからスタートしました。

この経験を踏まえて、2年目に町内会長を引き受けました。役員会に諮りながら、町内会活動の改革に乗り出しました。具体的には

- ①わかりやすいルールをめざし、規約を改訂しました。
- ②会長1人にまかせず役割を分担しようと、役員を增強しました。
- ③みんなで話し合うため、会議を増やし、電話やメールも活用しました。
- ④「一斉清掃の廃止」「赤十字・共同募金・社会福祉協議会の寄付の見直し」などを行い、住民に対する半強制的な活動を取りやめました。
- ⑤幅広い情報の共有をめざし、町内会だより（月1回）を発行しました。
- ⑥町内アンケートで「いざという時のお互いの助け合い」をみんなが求めているとわかったので、住民同士の交流を深めることにしました。盆送り盆送り火行事（8/15）に、子供会、商工会と連携して「小さな縁日」を開催。お年寄りや子供たちだけでなく、現役のお父さんやお母さんたちも参加して賑わいました
- ⑦効率的な財政運営を目指し、町内会費は減額。組会計を廃止しました。

3年目には、校区の活動にも目を向けました。駅前町内会の属するK校区は、9年前に自治協議会が発足した際も、従来からの組織である町内会連合会を解散せず、自治協議会との二重構造が続いていたのです。

駅前町内会は、町内会連合会から脱退し、自治協議会に一本化することにしました。これに対し、校区の自治組織を牛耳る連合会の幹部が反発して、自治協議会からも駅前町内会を排除しようとする動きを見せました。具体的には、校区自主防災組織や人権尊重委員会から、駅前町内会を排除しようという、現代の「村八分」のような動きです。ちなみに、昔の「村八分」には、排除しても「火事と葬式」の「二分」は保っていたから八分、という説があります。現代の「村八分」と比べると興味深いところです。

わが駅前町内会は、東区役所とも相談しましたが、町内の住民生活に直接の影響は出ていないため、事態を静観中です。

一方、町内の活動としては、住民同士の交流をさらに深めるべく、この年から春に「花見会」を開催しました。これで、夏の「ちいさな縁日」、秋の「やきいも大会」とあわせて、町内の三大年中行事がそろいました。

4年目のいまは、従来4つだった組の再編に取り組んでいます。これまでの3組と4組を合併して新「3組」とする一方、町内に出店している16店をまとめて、新たに「出店グループ」としました。

さらに、現町内会長の任期切れとなる来年度に向けて、次期会長を選出するためのルールづくりに取り組んでいます。「誰でも気軽に参加できる町内会」を目指し、役員会で議論を重ね、アンケートも実施しました。すでにある「組長の順番制」を活用して、新たな町内会長の選出も行っていく方針です。

「誰がまず来年度の会長になるか？」が、今後の検討課題です。年明けに役員会や各組の常会、そして年度末の総会と、これから話し合いを積み重ねていきます。現会長としては、次の会長が決まるまで、気苦労が続きます。

## 連載

### 集団力学研究所 大浜参入記（その3）——緊急事態

2013年夏、研究所の入居先である百年町屋「高橋邸」を、思わぬ事態が見舞いました。町屋保存の難しさを突きつけられたと同時に、高橋邸の価値と、そこで活動することの意義を、あらためて見つめ直していくことになります。

---

#### 緊急事態

研究所の移転に協力し、そのリフォームに携わってきた市岡恒夫は、2013年の初夏も高橋邸の修理にあたっていた。長年の風雪に耐えてきた町屋には、手入れの必要な箇所も少なくない。博多で建築会社を営む一級建築士の市岡は、歴史的建造物の修復と保存にも豊富な知識と経験を持っている。市岡はまた、所長の杉万とも幼なじみの間柄だった。

このとき市岡は、町屋の外壁が老朽化して水が入り込み、劣化の進んでいる箇所を修理していた。しかし、市岡には別の懸念があった。高橋邸の北側、2軒隣の建物で、解体作業が行われていたのである。間に1軒置いているとはいえ、場合によっては高橋邸に影響が及ぶかもしれない。

ところが、事態は思いもかけぬかたちで急展開した。緩衝地帯だったはずの北側の隣家まで、突然解体されることになってしまったのである。一帯は高橋邸と同様、いずれも奥行きが深く間口の狭い、細長い土地ばかり。一気に2スパン分の建物を解体し、更地にしてしまおうという動きらしい。

ただ、転売が重ねられたらしく、隣の土地や建物の所有者は判然としなかった。解体の発注主も解体後の用途も詳細は不明。それぞれの代理人や業者が入り乱れ、よくわからない状態のまま、隣家の解体工事が始まってしまった。

隣家は鉄筋と木造の混じった古いアパートだったが、まさに町屋のごとく、高橋邸と壁面を共有する構造になっていた。さらに、隣家の土台が高橋邸の足元に隣接するなど、互いに支え合う構造になっていた。解体だけでも影響が避けられないのに、これでは工法次第で高橋邸に深刻なダメージが生じてしまう。そのうえ、解体に伴って境界を測定し直した結果、高橋邸の側がほんの少し隣家にはみ出していることもわかった。

ここで市岡が間に入ったことは何よりの幸いだった。先方の業者と工法を確認し、高橋邸の安全を確保した。境界線についても、「時効取得」という法制度の存在を真っ先に示し、トラブルの発生を未然に防いだ。たとえ境界を越えていても、一定の年数を経過しているものは所有を認める、というのが、民法における時効取得の規定である。今回の場合も高橋邸側の所有が認められる。しかし、こうした知識がなければ、境界を越える分の賠償や買い取りといった金銭問題に巻き込まれてしまったかもしれない。

市岡のおかげで、もっとも深刻な危機は回避された。しかし、隣家は解体されて更地となり、高橋邸の北側側面は、すっかりむき出しになってしまった。その後、新しい工事がすぐに始まるわけでもなく、高橋邸の壁面はブルーシートに覆われたまま風雨にさらされることになった。秋風が強まると、シートのばたつく音や、壁面のトタンのぶつかりきしむ音が、研究所の事務スペースにも響いてきた。

地域塾例会の場を借りて、緊急の会合が行われた。家主の大塚夫妻は、相手先との緊張のやりとりや、解体に伴う高橋邸の破損の恐れなど、不安な日々を振り返り、思いを吐露された。文化財指定されたことでひとまず安心し、高橋邸の修理を今後どう進めるか考えていた矢先の出来事だった。一連の事態は、町屋を残す難しさをあらためて実感させた。

研究所にも、今後どう活動し、町屋の保存と活用はどう貢献すればよいかという新たな課題が生まれた。

その一方、市岡はまた違った見方を示した。高橋邸の修理のことを考えれば、隣家と密着状態だった床や柱に風を通せるようになったのだから、必ずしも悪いことではない。町屋という文化財は、いわゆる「お宝」とはちがう。失われた時代の良き佇まいと、そこで積み重ねられた生活を伝えるのが町屋の価値。だから、修理を重ねつつ、生きて使いながら残していくことが大事だということである。

高橋邸の2階、床の間のある三間続きの広間に、市岡は注意を促した。古い町屋もリフォームや改築で姿を変え、どんどん解体されていく中で、なぜ高橋邸の、この古めかしい広間が残ってきたのか？ 子ども部屋に改築するなど、手を入れることもできたはずなのに、なぜ続きの大広間として残されてきたのか？

人の集まる場所、地域のなかの、いわば公的な場所として残そうという意図があったからこそ、高橋邸、そしてこの広間が残ってきたのではないか。それが市岡の見立てだった。この言葉は、家主の大塚夫人にも、幼い頃の情景を思い出させた。かつての大広間は、講や寄り合いなど、近所の大人たちがたびたび集う場所でもあった。

「人々の集う場所」……それは、高橋邸の保存と新たな活用、そして研究所の活動に、ヒントを与えているのかもしれない。



# 研究所からのお知らせ

## 「ビデオ講座 集団力学」好評販売中

グループ・ダイナミックスの理論と実践をビデオでわかりやすく解説。  
「入門編」は無料で視聴いただけます。  
詳しくは研究所ホームページ「出版・ビデオ講座」をご覧ください。

## 組織診断アンケートは「集団力学研究所」で

組織や職場を診断するアンケート調査を受託しています。

- 比類ない実績を誇る「リーダーシップPM調査」
- そのエッセンスを凝縮した「5分間組織診断アンケート」

職場と組織のご関心にあわせて柔軟に対応します。詳しくは研究所ホームページ「組織診断・研修」をご覧ください。

## 「看護管理者支援プロジェクト（福岡地区）」スタート

看護の現場の組織活性化と、よりよい職場作りを支援する、新しい研修プログラムです。  
「集団力学セミナー」と「夢（ビジョン）を描く技法セミナー」の2コース、ほぼ実費のみの価格設定。

詳しくは研究所ホームページ・トップ画面のバナー「看護管理者支援プロジェクト」からお入り下さい。